

令和 6 年度 鳴門市総合教育会議 議事録

令和 7 年 3 月 1 2 日（水）15 時 30 分に鳴門市役所本庁舎 3 階 庁議室で開会
同日 16 時 40 分に閉会した。

・出席者

（会議構成者）

泉市長、阿部教育長、甲斐委員、加藤委員、濱川委員、川上委員

（会議構成者以外）

市長部局

谷副市長、小泉政策監、利穂事業統括監

教育委員会事務局

小川教育次長、竹下参事兼教育総務課長、梶原学校教育課長、中妻学校教育課主幹
会議事務局

喜多秘書広報課長、藤倉秘書広報課副課長

・傍聴者

1 名

・会議は、市長が議事を進行した。

・議事の内容は次のとおりである。

- （１）学力向上について
- （２）部活動の地域移行について
- （３）学校の適正規模・適正配置について

喜多秘書広報課長は、15 時 0 0 分に令和 6 年度 鳴門市総合教育会議の開会を宣言した。

喜多秘書広報課長は、鳴門市総合教育会議設置要綱第 5 条の規定に基づき、議事の進行を市長に求めた。

市長は、議事（１）学力向上について説明を求めた。

教育委員会事務局は、学力向上について説明を行った。

市長：

学力向上について、委員皆様からのご意見、ご提案をいただきたい。

濱川委員：

個人的な意見となるが、中学生頃から国語のテストにおける平均正答率が落ちていることについて、スマートフォン普及率の上昇が原因だと感じている。昨年、オーストラリアでは 16 歳未満の SNS 利用を禁止する法律が成立した。

スマートフォンの普及によって、辞書を引く機会が少なくなり、設定した目的にたどり着く過程を経験することが減ってきている。便利な物を手に入れることで、学力を失ってきていると感じるので、抜本的な解決策を考える必要がある。事務局の説明にもあった「書く力」「やり抜く力」の育成というのは少しレベルが低いと考えている。

甲斐委員：

現在は、1つの教室の中に様々な学力レベルの子どもたちがいて、一斉に同じ箇所を教えて、同じテストを実施している。その授業についていけない子も確実に出てくる中で、これまでと同じ授業の進め方を取るのは難しいと思う。また、中学生に対して、学力向上施策を取り入れても遅いと考えており、高校受験などに必要な学力は、小学生の頃に学ぶ基礎学力がとても大切となる。そのため、小学生の段階で授業からついていけない子を救い上げるような体制作りが必要だと感じる。

また、国語の力を伸ばすためには、幼稚園など就学前からより多くコミュニケーションを取り、言葉をたくさん浴びる習慣をつけると良いと思う。

阿部教育長：

今の子どもたちの生活様式について、私たちが子どもだった頃と変化している。以前は、下校すると近所の子ども同士でいろいろな遊びを経験した。現在の子どもは、下校すると家の中でスマートフォンなどを使ってゲームをしている。

濱川委員の意見の中でもあった国語力の低下については、私自身昨年まで小学校の校長をしていたので、テストの結果を見ればものすごく分かる。以前、教員の研修会に参加した際に聞いた、徳島新聞のNIEコーディネーターをされている野口幸司先生の話の中で、今の子どもたちは言葉を獲得していく上で大切となる体験を通して獲得する一次的言葉が圧倒的に不足しているので主語・述語を用いた二次的言葉も不足していると感じる。そのため、一次的言葉を学べるような体験を補う施策を考えていくべきだと感じる。

川上委員：

テストの点数を上げるためには、日頃から継続してこつこつと本読みや小テストなどを行うことが大切だと思う。

加藤委員：

全国トップクラスの学力を持つ県外他市の教育モデルは、その市独自の学習スタイルが確立されている。小学校・中学校が一貫してすべての授業に関して進め方が決まっており、掴む、考える、まとめる、の3つに分けて1つの授業を形成している。一貫して徹底的に教育を行うと、積み重なって子どもたちにより学力が身につくのではないかと思う。

また、教員採用試験についても模擬授業から市が定めた授業スタイルを義務付けている市もあるので参考にしていきたい。

市長：

それぞれ委員の意見を聞かせていただき、スマートフォンの使用については鳴門市だけでなく、全国的、また世界的な問題だと感じている。現在、教育委員会では生徒１人１人に対してタブレットを配布しているが、使用については一定の制限をかけることを考えている。また、現在の子どもたちはほとんど辞書を引く機会が少ないのが現状だと思う。自分が求めた答えに辿り着く過程を日頃から経験することがとても大事であると考えている。

また、小学生の時点でクラスの授業についていけなくなる児童については、それぞれ児童の力量によって異なる。現在、鳴門市では AI ドリルを導入しており、苦手な分野やこういった課題が見られるのかを AI が判断してくれる機能があるので、徹底して使用していきたい。

全国学力学習状況調査についてもテストを実施する単年度でだけを見て学力を判断するのではなく、小学校４年生から中学校３年生まで中長期的に成績を見ていきたいと考えている。また、川上委員の意見にもあった小テストなど習慣的に行うことで成功体験が積み重なると児童のモチベーションに繋がっていくので検討していきたい。

現在鳴門市の場合は、それぞれの先生の指導方法で授業を行っている。そのため、教える先生が変わると授業の進め方が異なり、児童もリセットしている感覚があるのではないかと思う。子どもたちにとってどういった授業形態が良いのか判断しかねるので定例の教育会議や教育委員会でお話いただいて学校も含めた形で取り組んでいただければと考えている。

市長は、議事（２）部活動の地域移行について説明を求めた。

教育委員会事務局は、部活動の地域移行について説明を行った。

市長：

部活動の地域移行に関する問題点について、各委員は地域の様々な状況を把握されていると思うのでそれぞれの地域の実情を踏まえて、ご意見、ご提案をいただきたい。

川上委員：

以前研修会に参加した際に、部活動の地域移行における先進地の教育委員と話をする機会があった。そこでは、スポーツコミッションを立ち上げ、その団体が様々な競技の地域移行における受け皿を担っている。団体の予算については、スポンサーを募って資金を調達し、足りない分に関しては市が負担する形を取っており、鳴門市で同じ形を採用することは現実的ではないかもしれないが、完全に部活動を地域移行するためには考えなくてはならない手段と思う。現時点では、地域移行できる種目から徐々に取り組んでいくことが一番現実的だと考えている。

また、中学校の先生で部活動を指導したい先生はどのくらいいるのか教えてほしい。

教育委員会事務局：

昨年度行ったアンケートでは3割から4割ほどとなる。引き続き今年度もアンケートを取ったところ、長年、部活動に携わってきた先生方は、学校で部活動を指導するのも仕方がないと感じている一方で、若い先生方は地域移行を段階的にでも進めてほしいという意見があった。

また、部活動の指導を行いたい先生については、副業として地域クラブ活動の指導を行い、謝金を受け取ることができる制度の整備も構築されている。

加藤委員：

県内他市では、市の体育振興公社が主催となり週に1度、中長距離ランナーの育成講座を開催している。こういった取り組みも部活動の地域移行における一端ではないかと考えている。

部活動の指導については、日常働きながら行うのは難しい現状があり、市が経験に長けている指導者を雇用することや部活動専門のコーディネーターというポストを設けて指導者を確保するのも1つの策だと感じている。

鳴門市在住の学生が県大会や全国大会で活躍すると市全体が盛り上がるので、よりレベルの高い選手を1人でも多く生み出せる体制を作ってほしい。

甲斐委員：

現在、スポーツ少年団の指導者が高齢化している団体も多くあり、次期指導者の育成も問題となっている。そのため、地域移行の受け皿となる団体を決定する際には次期指導者が育っているのかも確認する必要がある。また、今の時代にそぐわない考えを持っている指導者に対する研修もしっかりと行う必要がある。

川上委員：

個人的な意見となるが、完全に移行するのは無理があると感じている。競技人口が少ない競技については、比較的スムーズに移行できると思うが、競技人口が多いとそれぞれの保護者の意見もあり難しい。

阿部教育長：

部活動の地域移行において、一番大きな点は教員の働き方改革だと考えている。

国における運動部活動の地域移行に関する検討委員会議提言には、休日の部活動から段階的に地域移行をしていくと明記されているが、なかなか進んでいないのが現状である。教員の勤務時間内で部活動の指導が出来るような制度や休日に指導を行った場合は、その分を代わりに平日に休みを取得するなどの対応策を考える必要がある。

勤務時間内に完結できるような職務でなければ、長続きしないと考えている。

市長：

多角的な視点からご意見をいただいた。それだけ部活動の地域移行というの大きな課題がある。以前は、スポーツクラブを含めて民間事業者が全くなかったが現在はできている。民間に移行できる業務は段階的に移行してもよいのではないか。鳴門市では部活動の地域移行をするためのマンパワーと施設の数もまだ十分とは言えない。

スポーツの部活動が地域移行の問題として表に出てくるが、文化部も同じように地域移行を考えなければならない。

現在、バドミントンなど個人スポーツで、比較的競技を行うのに場所を確保しやすい競技人口が増えてきている。スポーツを1つにまとめるのではなく、個人スポーツと団体スポーツ、また、競技人口の数に切り分けて考える必要のではないか。

市長は、議事（３）学校の適正規模・適正配置について説明を求めた。

教育委員会事務局は、学校の適正規模・適正配置について説明を行った。

市長：

子どもの数が減少している中で、コロナ禍以降、鳴門市での出生数が年間約 200 人となっている。その現状を踏まえると、今の学校規模・配置を維持し続けていくのは難しい。

現時点で、小学校・中学校よりも前に就学前施設が少子化の影響を受けてきている。また、高等学校入試における出願者の倍率を見ても倍率が1倍を超えている高等学校の数がほとんどなくなってきている。高等学校においても今後、学区制の廃止の動きにあわせて大きな再編も考えられる。

各委員の意見をもとに定例教育会議や次回の総合教育会議で議論を深めていきたいと考えているのでご意見、ご提案をいただきたい。

川上委員：

私は、北灘中学校と瀬戸中学校を合併する際の委員会に委員として参加させてもらっていたが、とても大変だと感じた。それは、地域の方に会に参加していただくと、その方々の過去の思い出が先立ってしまい、今在校中の子どもたちやこれから成長していく子どもの話は出てこなくなり、本質的な合併の話はなかなか議論できない。今の子どもたちの数を見ても現状の学校規模を維持していくのは難しいと感じるので、例えば市当局と教育委員会で大きな枠組みを提案していただき、それぞれの地区に合った小学校・中学校の議論をしていくべきだと思う。市が先頭となり地域の方々への説明も行ったうえで、教育委員会と連携しながら進めていくのが理想だと考えている。

また、再編に合わせた施設の更新や閉校や休校となった学校の建物の活用方法も課題だと感じている。

濱川委員：

徳島県全体の人口が減ってきているなかで、施設総量を減らす目的で小中学校を別々に編成するのではなく、施設一体型の義務教育学校に再編するのも考えていくべきだと思う。

甲斐委員：

同じく施設一体型の義務教育学校に再編するのは良い考えだと思うが、スクールバスなどの運送事業者を確保するのが大変だと思う。また、スクールバスの直営化も検討すべきと考える。

加藤委員：

以前は小学校の合併の話があると地域の方々から様々な反対の意見が出てくる印象があったが、鳴門市内においても何度も小学校や幼稚園の合併の実績があり、身近で経験しているため地域の方や保護者の方の意識も変わってきているのではないかと思う。また、合併や統合に対するノウハウに関しても市や教育委員会も蓄積されていると思う。

1学年に複数のクラスがあると教員にとっても切磋琢磨できる関係性を築けるうえに、それぞれの教員の得意分野に関して情報交換を行うことができる。

教育委員会事務局：

先日説明に訪問した学校についても、大規模学校に通わせることでいろいろな経験を積ませたいと考える意見や学校をこのまま残してほしいという意見など保護者の方々から様々な意見が出てきている。説明を行った時の感想としては、加藤委員の意見にもあったように合併や統合に対して反対の意見が少なくなってきたと感じている。鳴門市の少子化の状況を踏まえて、議会でも学校再編を進めてほしいという立場での質問も増えてきている。

難しい問題ではあるが、避けては通れないと考えているので皆様方の意見も伺いながら進めていきたいと考えている。

阿部教育長：

私が通っていた学校も閉校となり、地域の方々の寂しさを感じるとともに近所に子供がいなくなることで、この先の若い世代の方々がこの地で子育てをしてくれるのか不安に感じる。

県内他市の状況を見ると、1学年に2学級をキープするには、現在ある学校を半分ほどにするために動いている市もあり、地域の方々の寂しさよりも鳴門市全体を1つの地域と捉えて新たな学校制度を作っていくかといけないう。鳴門市は、自然環境や教育支援というのは素晴らしいものがあるのでしっかりとアピールをし、学校規模を適正にし、鳴門市で子育てしたいと思う若い世代の方を増やすために取り組む必要があると考えている。

市長：

平成 10～20 年代の頃の再編については、加藤委員の意見にもあったように地域の方々から反対の意見が強くあったと記憶している。明治時代以来、小学校を中心にまちが出来てきたという歴史があり、小学校が1つのまちの基盤となっていた。その基盤がいきなりなくなると、まちのモデルが崩れると考えている人も多くいる。

以前に地域の方からの意見にもあったのが、その地域から小学校がなくなったときに地域のまちづくりにおけるモデルケースを示してほしいという意見があった。市当局と教育委員会が積極的に再編を進めてほしいという意見もいただいたので、ある程度の骨格となるものは必要だと思っており、それぞれの考え方をすり合わせていきながら来年度からは少しずつでも踏み込んでいきたいと考えている。